

創 立 訓
修為要領十七条



学校法人 昌平黉
東日本国際大学附属
昌平中学・高等学校

論語卷之一

朱熹集註

學而第一

此爲書之首篇故所記多務本之意乃入道之門積德之基學者之先務也凡十六章

子曰學而時習之不亦說乎

說悅同學之爲言效也入性皆善而覺有先後

後覺者必效先覺之所爲乃可以明善而復其初也習鳥獸飛也學之不已如鳥獸飛也說喜意也既學而又時時習之則所學者熟而中心喜說其進自不能已矣程子曰習重習也時復思繹浹洽於中則說也又曰學者將以行之也時習之則所學者在我故說謝氏曰時習者無時而不習坐如尸坐時習也立如齊立時習也

有朋自遠方來不亦樂乎

樂音洛朋同類也自遠方來則近者可知程子曰以

善及人而信從者來故可樂又曰說在心樂主發散在外

創 立 訓

修為要領十七條

目 次

修為要領十七条	3
修為要領十七條（漢文）	4
修養要領十七条（中国語訳）	5
자기수양을 위한 17조（韓国語訳）	6
17 Educational Tenets（英語訳）	7
17 articles pour se former（仏語訳）	8
17 Artikel zur Selbstdisziplin（独語訳）	9
「修為要領十七条」釈義	10
表紙絵…孔子像（万曆版「聖蹟図」）	

創 立 訓

※下記の「修為要領十七条」は、本校の前身昌平中学校（のちの昌平高等学校）の創立者・田辺新之助先生が昌平黌精神の具現化を図るうえで、明治35年（1902）に生徒に示した徳目であり、本校の指導目標をなすものです。

修 為 要 領 十 七 条

1. 人の貴き所以は外物に存するにあらずして、己の心にあることを思ふべし。
2. 自ら重んずると共に他を尊むべし。
3. 自信を厚うすべし、善に遷るに吝なるべからず。
4. 独立の心を強うすべし、協同の念を離るべからず。
5. 誠実なるべし、己を欺くこと勿かれ、人を欺くこと勿かれ。
6. 勇敢なるべし、狂暴なるべからず。
7. 謙讓なるべし、卑屈なるべからず。
8. 質素なるべし、不潔なるべからず。
9. 労苦に耐ふべし、心身の鍛練を怠ること勿かれ。
10. 己に克つべし、外物に心を奪はるること勿かれ。
11. 心を専一にすべし、妄念に駆らるること勿かれ。
12. 秩序を重んずべし、自恣放逸の言行あるべからず。
13. 趣味を高尚ならしむべし、天然に親しむべし。
14. 同情を有すべし、己の欲せざるところは、人に施すこと勿かれ。
15. 義気あるべし、幼弱を扶くべし、強暴に屈すべからず。
16. 知るは知るに止まらざるべし、修為のためなることを忘るべからず。
17. 自利の念を離るるに随ひて、人格の高大を致すものなるを記すべし。

修 為 要 領 十 七 條

1. 人之所以貴者、非存外物而可思在己之心。
2. 可既重己又尊他。
3. 可厚自信、不可吝遷於善。
4. 可勵獨立之心、不可放協同之念。
5. 可誠實、勿欺己、勿欺人。
6. 可勇敢、不可狂暴。
7. 可謙讓、不可卑攝。
8. 可質素、不可有垢汙。
9. 可耐辛苦、勿怠鍛鍊心身。
10. 可克己、勿牽心於外物。
11. 可一意搏心、勿被驅妄念。
12. 可重秩序、不可有自恣放逸之言行。
13. 可覓高雅之趣味、可友天然。
14. 可有惻隱之心、己所不欲勿施於人。
15. 可有義氣、可扶持幼弱、不可被屈強暴。
16. 知非止於知而不可忘當修為。
17. 可記隨離利己之念而使人格臻高情遠致。

修 养 要 领 十 七 条

1. 人之尊严不在名利等外在之处，而存在于自我心中。
2. 自尊、才会尊重他人。
3. 自信、对则付诸行动。
4. 自立、而不忘协同精神。
5. 诚实、而不自欺其人。
6. 勇敢、而不狂暴。
7. 谦让、而不卑怯。
8. 生活俭朴、爱洁净。
9. 吃苦耐劳、锻炼身心。
10. 克服自我、意志坚强。
11. 专心致意、去除杂念。
12. 尊守秩序、不任意妄为。
13. 趣味高尚、亲近自然。
14. 体谅他人、而不勉强其意志。
15. 维护正义、扶助幼弱、不屈暴力。
16. 提高修养、学无止境。
17. 大公无私、培养高尚之人格。

자기수양을 위한 17조

1. 인간이 높다든 것은, 부와 명예등의 외적인 것에 있는 것이 아니고, 자신의 마음속에 있다는 것을 생각할 것.
2. 자신을 소중히 여길 것. 그리고 타인을 존중할 것.
3. 자신감을 확고히 가질 것. 그것이 선하다는 것을 알았을 때에는 바로 실행할 것.
4. 독립심을 가질 것. 그러나, 협동정신을 잊지말 것.
5. 성실할 것. 자신을 속이지 말 것. 남을 속이지 말 것.
6. 용기를 가질 것. 그러나, 광포하지 말 것.
7. 겸양의 정신을 가질 것. 그러나, 비겁하지 말 것.
8. 소박할 것. 그러나, 불결하지 말 것.
9. 노고에 전덜 것. 심신의 단련을 게을리하지 말 것.
10. 자신을 극복할 수 있는 마음을 가질 것. 외물에 마음을 빼앗기지 말 것.
11. 집중력을 가질 것. 잡념에 휩쓸리지 말 것.
12. 질서를 존중할 것. 방자한 언행을 삼가할 것.
13. 좋은 취미를 가질 것. 자연과 친해질 것.
14. 타인을 배려하는 마음을 가질 것. 자신이 당하고싶지 않은 일은 타인에게 하지말 것.
15. 정의를 지키는 마음을 가질 것. 약한 자를 도울 것. 폭력에 굽히지 말 것.
16. 안다는 것은 아는 것에 그치는 것이 아니고, 자기수양을 위한 것에 있다는 것을 항상 염두할 것.
17. 자신의 이익을 추구하는 마음으로부터 멀어지면 멀어질 수록, 고결한 인격을 형성할 수 있다는 명기할 것.

17 Educational Tenets Concerning Ethical Basics

- 1 . Human dignity lies not in your appearances, such as wealth and honor, but in your mind.
- 2 . Think much of yourself and respect other people.
- 3 . Be confident in yourself . If you find anything good, do it at once.
- 4 . Be independent . But always remember the importance of cooperation .
- 5 . Be honest . Never deceive others .
- 6 . Be courageous in what you believe is right . But never be violent .
- 7 . Be modest . But never take a servile attitude .
- 8 . Live a simple life . But keep yourself and your belongings clean .
- 9 . Endure hard work and difficulties . Remember, train your body and mind constantly .
- 10 . Control your desires and overcome temptations .
- 11 . Don't lose concentration . Dismiss worldly thoughts from your mind .
- 12 . Make much of order . Restrain yourself from a self-centered way of rhetoric and conduct .
- 13 . Be elegant in taste . Be one with nature .
- 14 . Have consideration for other people . Do unto others what you wish them to do .
- 15 . Be resolute in preserving justice . Help the weak and young . Never yield to violence .
- 16 . You acquire knowledge not only to know but also to cultivate your mind .
- 17 . Keep in mind that the less you think of your own interests, the more noble character you can form .

17 articles pour se former

- 1 . Soyez en sûr, on est respectable pour son esprit, non pour sa richesse ou son honneur.
- 2 . Traitez avec soin les autres ainsi que vous-même.
- 3 . Ayez confiance. Pratiquez tout de suite ce que vous jugez bon.
- 4 . Soyez indépendant. Mais n'oubliez pas l'esprit coopératif.
- 5 . Soyez honnête. Ne trompez ni vous-même ni les autres.
- 6 . Ayez du courage. Mais ne soyez pas brutal.
- 7 . Soyez modeste. Mais ne soyez pas servile.
- 8 . Soyez simple. Mais ne soyez pas malpropre.
- 9 . Supportez votre peine. Ne négligez pas de fortifier votre corps ainsi que votre esprit.
10. Contrôlez-vous. Ne soyez pas fasciné par ce qu'il y a d'apparent.
11. Concentrez-vous. Ne soyez pas égaré par des idées décousues.
12. Respectez l'ordre. Gardez-vous de vos paroles et actes égocentriques.
13. Ayez bon goût. Vivez en ami de la nature.
14. Ayez du cœur pour les autres. Ne faites pas pour eux ce que vous ne voulez pas qu'ils fassent pour vous.
15. Défendez la justice. Aidez les petits et les faibles. Ne cédez pas à la violence.
16. N'oubliez pas que savoir n'est pas pour savoir mais pour se former.
17. Retenez bien que moins on pense à ses intérêts, plus on peut former sa personnalité généreuse.

17 Artikel zur Selbstdisziplin

1. Man muß davon überzeugt sein, daß das Kostbare des Menschen nicht in Äußerem wie z.B. Reichtum und Ruhm besteht, sondern in Innerem!
2. Schonen Sie sich! Respektieren die anderen!
3. Haben Sie Selbstvertrauen! Verwirklichen Sie sofort, was Sie für gut halten!
4. Seien Sie selbständig! Aber vergessen Sie nicht den Gemeinschaftsgeist!
5. Seien Sie gewissenhaft! Täuschen Sie sich selbst nicht als auch nicht die anderen!
6. Seien Sie mutig, aber nicht extrem!
7. Seien Sie bescheiden, aber nicht kriecheisch!
8. Leben Sie in schlichten Verhältnissen, aber nicht in unsauberen!
9. Scheuen Sie keine Mühe und Arbeit! Stählen Sie Ihren Körper und Geist!
10. Man muß sich auch einmal überwinden! Seien Sie nicht begeistert vom Äußeren!
11. Man muß sich gut konzentrieren! Seien Sie nicht zerstreut mit unnötigen Gedanken!
12. Man muß die Ordnung hoch schätzen! Keine egoistischen Worte und Taten!
13. Haben Sie einen guten Geschmack! Machen Sie sich mit der Natur vertraut!
14. Seien Sie rücksichtsvoll gegen die anderen! Was man selbst nicht will, soll man den anderen nicht zufügen!
15. Haben Sie Gerechtigkeitssinn! Helfen Sie den Schwächeren! Weichen Sie nicht der Gewalt!
16. Denken Sie daran, daß das Wissen nicht um des Wissens willen ist, sondern zur Selbstdisziplin
17. Merken Sie sich: je weniger man über seinen eigenen Vorteil nachdenkt, umso großzügiger das eigene Selbst wird!

「修為要領十七条」 釈義

1. 人の貴き所以は外物に存するにあらずして、己の心にあることを思ふべし。

わたしたちはともすると、自分をも他人をも含めて、人間存在の価値基準を外に現れたもの——例えば、運動能力があるとか、勉強ができるとか、富や名誉があるとかなど——によって測ったりします。確かにそれらは評価の対象にされてもいいことでしょう。しかしそれらは、わたしたちの外側にあるもの、すなわち外物です。大切なのはそれらを支える心の在り方がどうかということであり、それによってわたしたちの存在価値はきまるのです。他者との比較においてではなく、自分の自分自身に対する価値です。カントは言っています、「わが上なる星の輝ける空と内なる道德律とは……感嘆と崇敬とをもって心を満たす二つのものである」(『実践理性批判』)と。わたしたちも、美しい星空のような内なる道德律をもちたいものです。

2. 自ら重んずると共に他を尊むべし。

自分の存在を軽視したり、自分を見限ったりするものは、他者の存在を認める目を失うものです。『論語』に、「冉求曰く、子の道を説ばざるに非ず^{あら}。力足らざればなり、と。子曰く、力足らざる者は、中道にして廃す。今、汝は画れり^{かぎ}、と」とあります。意味はこうです、「冉求が言うには、『先生の言われる〈道〉というものをすばらしいものと喜ばないわけではありませんが、力が足りないのわたしにはついてゆけません』と。すると先生が言われるには、『たしかに力が足りない者は、途中で力が尽きてやめてしまうだろう。しかしお前は、自分はだめだと自分の力に見切りをつけているのだよ』と。」自分の可能性を信じ、自分を唯一無二の存在として大切に思う心が、そのま

ま他者を尊重する心に通じるのです。他者を尊重するということは、人種や思想・信条が異なっているからといって差別したり排除したりすることなく、その人の人格や権利を認めることです。孔子のことはと言えば「恕」——他者を思いやる心——です。ヴォルテールは、「あなたの言うことにはひと言も賛成できるところはないが、あなたにそれを言う権利があることは、死を賭しても守るつもりです」と言っていますが、このことはまさに「他を尊ぶ」精神の究極のものといえるでしょう。

3. 自信を厚うすべし、善に遷るに吝なるべからず。

自信とはみずからの力を信じることです。大いに自信を持ちなさい。しかし、自信にはそれを支えるだけのしっかりとした根拠がなければなりません。根拠がないのに自信ばかり大きいことを自己過信といいます。それも時として結構でしょう。飛躍するためのジャンプ・ボードになり得る可能性もありますから。しかしそれは薄氷を踏むような危険をとまなうものです。確固とした自信を持つためには、たゆまぬ努力が求められます。つまり、努力の積み重ねによってしか自信は厚くならないのです。

また「善」なるものを見いだしたら、ためらわずに「善」に移りなさい。わたしたちは理性や良心に照らして、それを「よいこと」と判断したり感じたりしても、なかなか実践できないものです。それは一種の人間的な弱さと言えましょう。『論語』にはこうあります、「子曰く、我、三人行えば必ず我が師を得。其の善なる者を挾えらびて之これに従ひ、其の善ならざる者にして之を改む、と」（先生が言われるには「わたしは、三人で行動したら、きっとそこに自分の師を見つける。善い人を選んでそれを見ならうようにし、善くない人については、その善くないことを、自分自身について直すからだ」）。少しでもよりよい方向へ進もう

と考えて行動するようにしましょう。「吝^{りん}」とは、骨惜しみすること。「善」の方向に移るのに骨惜しみしてはならないのです。孔子の言うように「過^{あやま}てば則ち改むるに憚^{はばか}ること勿^なかれ」です。朱熹は「忿^{しゆき}りを懲^いめて慾^{ふさ}を窒^{とど}ぎ、善に遷^{うつ}りて過ちを改む」(『白鹿洞書院揭示』)ということ、日々の生活の努力目標に掲げていました。

4. 独立の心を強うすべし、協同の念を離るべからず。

「独立」とは他者の支配を受けずにひとりで立つことです。「独立するも影に慚^{はぢ}ず」(『晏子』)ということばがありますが、これは、一人でいるときも他人に見られて恥ずかしいようなことはしない、という意味で、自己の確立についていったものです。「協同」とは、互いに力をあわせることです。協力することです。したがって、標掲の句の意味は、他者の指示を待ったり、他者に迎合するのではなく、自分自身の立場をしっかりと持つこと、そして常に他者と協力しようと心掛けること、ということになります。いうなれば自律の精神と連帯の意識を合わせ持つことです。〈独立の心〉と〈協同の念〉とは決して相反するものではなく、むしろ不離の関係にあります。ゆるぎない自己を確立してこそ真の連帯は可能です。自己確立なくして相集まる者を〈烏合の衆〉と言いますが、そうならないために自分をしっかりと育て上げる努力をしましょう。『論語』には、「子曰く、君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず、と」とあります。意味は、君子は和合はするが付和雷同はしない、小人は雷同はするが和合しない、ということです。

5. 誠実なるべし、己を欺くこと勿かれ、人を欺くこと勿かれ。

みずからの良心に従って誠実でありなさい。良心に従って行動し、自分をも人をもあざむいてはなりません。『論語』には「夫子^{ふうし}の道は、

ちゆうじよ
忠恕のみ」とあります。忠とは誠実、恕とは思いやりという意味です。孔子は自分に対しても人に対しても〈忠恕〉の一事をもって貫きました。『論語』にはまたこうもあります。「子路、君に事^{つか}ふことを問ふ。子曰く、欺^{しか}くこと勿^なかれ、而^{しか}して之^{これ}を犯^{おか}せ、と」と。子路という孔子の弟子が、君に仕える道を尋ねたとき、孔子は、(まごころをもって仕え) あざむいてはいけない、そして君の機嫌を損じてでも忠告するという誠実さがなければいけない、と言いました。このことは何も〈君〉に対する態度についてのみ言うものではありません。たまたま子路の質問に答えただけで、孔子が広く人との関係において誠実さを一番重視していたことはいうまでもありません。

6. 勇敢なるべし、狂暴なるべからず。

勇敢すなわち勇氣とは、決して狂暴さをともなうものではありません。『論語』に「子曰く、暴虎馮河^{ばう こ ひやうが}し、死して悔ゆる無き者は、吾れ与^{とも}にせざるなり、と」とあるように、孔子は、虎を素手でなぐったり、黄河を歩いて渡ったりして、死んでも後悔しないような者とは、行動を共にしないとめています。肉体的な力は勇氣とは違うのです。勇氣とは正義と正直さに基づく心の力です。『孟子』には「自ら反^{みづか}みて縮^{かへり}くんば、千万人といへども吾^われ往^ゆかん」とあります。それは自分の心が正直であれば、なにものも恐れるに足りないという意味です。

7. 謙讓なるべし、卑屈なるべからず。

謙讓とは、へりくだることです。どんなに自信があっても実力があっても、それを鼻にかけたりするようでは人間的品位に欠けることになりましょう。わたしたちは弱い存在で、ちょっとした能力や才能によって自信過剰になったり、傲慢になったりして、人を見くだしがちになるものです。ことわざに「実^{みの}るほど頭^{かうべ}を低^たるる稲穂^{いなほ}かな」とあります

が、真に実力のある人は謙譲の美德を持っているものです。謙譲といっても、必要以上にへりくだると卑屈になります。相手の意に取り入ろうとして小賢しい知恵を働かせると卑屈になります。常に自分を高めようとする気持ちを持っていれば、心は光に満たされ、決して卑屈になるようなことはありません。

8. 質素なるべし、不潔なるべからず。

流行を求めることは必ずしも悪いというわけではありません。それは進取の精神にも通じているからです。しかし華美なものを求めたり、奇矯な風俗に染まったりして、時俗に押し流されてしまうのはあまり感心できません。質素の美とでもいうべきものに心掛けることが、大いに学び、より向上しようとするあなたがたの現在においては、大切なのではないのでしょうか。また外見的な質素は、内面的な質実にも通じるでしょう。『論語』には、「子曰く、^{がう き ぼくとつ}剛毅朴訥は仁に近し、と」とあります。孔子は、質朴で、^{しら き}白木のような飾らない精神のありようを、仁に近いものと見て評価したのです。そしてうわべを飾るものを、「巧言令色、^{すくな}鮮きかな仁」（ことば巧みでうわべをかざるものは、すくないなあ、仁が）と言って否定しています。

9. 労苦に耐ふべし、心身の鍛練を怠ること勿かれ。

今の若い人は苦勞を厭うとよく言われますが、わたしたちの生活環境があまりにも便利になり、また物質的にも豊かになっているために、そうなるについては仕方のない側面もあると思います。わたしたちは、よほど目的意識をしっかりと持っていないかぎりには、おおむね環境に左右されてしまいますから。しかし、自分の置かれている満たされた環境にどっぷり漬かっていると、心にとるみを生じて、清新潑刺とした精神を失ってしまいます。事を成就しようとする者は、冬の厳しさ

を伴侶とするものです。高村光太郎は「冬よ来い、ぼくに来い」とうたっています。また「艱難、なんじを玉にす」ということばが示すように、逆境こそ精神の道場です。精神も肉体も、苦勞に耐えることによって鍛えられ、発達するのです。「若いときの苦勞は買ってでもせよ」と言われるゆえんです。心身の苦勞に耐え得る意志力を養い育てることが、若いあなたがたの課題ではないでしょうか。あるいはこうも言えましょうか。心身の鍛練に耐え得ることこそが、若さの証^{あか}しであると。

10. 己に克つべし、外物に心を奪はるること勿かれ。

『論語』に「己に克^かちて礼を復^ふむを仁と為す」とあります。このことばの意味は、自分の私利私欲にうち勝って先王の定めた礼法を踏み行うことが仁である、ということですが、標掲の句は、この孔子のことばに立脚しつつ、個の確立の側面に視点を据えて述べたものです。日々を無為・無目的に過ごす者にとっては標掲の句は無縁です。人は何かをなそうとすると、すなわち目的を持ったとき、その成就を目指して意識的に生きようとするものです。しかし為すべき目的を持ったとしても、その目的に向かって邁進^{まいしん}するのはなかなかむずかしいことです。自分を取り巻くさまざまな外的なものに心を奪われて横道にそれるばかりか、目的を見失ってしまうことさえあるからです。ですから、そこで求められるのは克己心です。目的の成就を妨げる誘惑のうち勝って、己を確立しようとする強い精神力を持たなければなりません。

11. 心を専一にすべし、妄念に駆らるること勿かれ。

この句は前の10条とほぼ同様な意味内容を持っています。ただし前条が人生を貫くものとしての自己確立をうながす句であるのに対

して、この句は眼前の為すべきことがらに対する態度について述べたものです。為すべきことがらがあった場合、さまざまな雑念に駆られることなく、その達成にいたるまで精神を集中しなければならないということです。

12. 秩序を重んずべし、自恣放逸の言行あるべからず。

一般的な生活を送る場合、わたしたちは自分ひとりで生きてゆくことはできません。わたしたちはさまざまな共同体——家族・学校・会社、それらを大きく包む社会——に属しています。それぞれの共同体においては、それを継続的に維持するための規範や秩序があります。その規範や秩序に従って交際する作法を〈礼〉といいます。〈礼〉は人が社会で生きてゆくために求められる基本的な要件です。『論語』のなかで孔子は、「礼を学ばざれば、^{もつ}以て立つこと無し」（礼を学ばなければ、人として世に立つことができない）と言い、孔子の弟子の有子^{ゆうし}は、「礼の用は和^{たふと}を貴しと為す。先王の道も、^こ斯れを美と為す。小大^{これ}之に由るも、行はれざる所有り。和を知りて和すれども、礼を以て之を節せざれば、亦行ふ可^{また}からざればなり」（礼の運用というものは、調和が大切です。古えの王たちのやり方も、この調和することを美しいこととしました。しかしながら、大小のさまざまなことがらは、調和することだけにたよったのでは、うまくいきません。〈礼〉で節度をもたせなければ、なにごともうまく運ぶものではありません）と言っています。〈礼〉の場に立つということ、すなわち標掲の句の「秩序を重んず」ということは、勝手きままなことをしないということです。「仁」という文字のもともとの意味は、人が重い荷物を背負ってじっと耐えている^{かたち}貌です。それを孔子は、心の在り方を示す意味に転化したのです。すなわち、ほしいままに逸脱しようとする心を抑えて、社会的な規範に耐えることです。自分の、ほしいままになろうとする心を抑えなけれ

ば、他者を思いやる心は生まれてきません。それが「仁」です。『釈名』という字書に「仁は忍^{にん}なり」とあるのも、「仁」をそのような意味で捉えたからですが、共同体の一員として自己を形成してゆくためには、勝手気ままな心を抑えて〈礼〉を実践しなければなりません。自由とはその上に成り立つのです。

13. 趣味を高尚ならしむべし、天然に親しむべし。

わたしたちは実用的・利便的なものだけで満たされるものではありません。自動車や自転車のハンドルに遊びがあるように、わたしたちの生活や精神にも遊びの空間が必要です。ホイジンガは、遊びは文化である（『ホモ・ルーデンス』）と言っています。ミサイルや机を作ったりするのは文明で、文学・芸術・スポーツなどは遊び＝文化として位置づけられますが、その遊び＝文化こそ精神の豊かさをもたらす土壌といえましょう。趣味は、遊び＝文化のなかから選び取られるものです。競輪・競馬・パチンコなどももちろん遊び＝文化であって、したがって趣味の対象たり得るのですが、はたしてそれが精神を豊かにしてくれるでしょうか。それらは慰めとしての娯楽であって、むしろ心の貧困を招くものとなりましょう。そこでわたしたちは、心が豊かになるような遊びの空間＝趣味を持つように心掛ける必要があるでしょう。

また心をなごませ、豊かな感受性を養うには自然に親しむことです。自然は時に狂暴で畏怖すべき相貌をもってはいますが、限りなく微妙で繊細です。その微妙で繊細な自然のさまざまな位相に寄り添うことによって、わたしたちは優しい心と繊細な感受性をつちかうことができます。自然に親しみ、そのさまざまな姿に目を向けてみましょう。

14. 同情を有すべし、己の欲せざるところは、人に施すこと勿かれ。

この場合の「同情」とは、あわれむことではありません。相手を思いやることです。孔子のことばでいえば「恕^{じよ}」です。わたしたちは、ややもすれば自己中心的になりがちです。自分の価値観でものを見るということは大切ですが、自分の考えにしがみつくとあまりに平衡感覚を失ってはいけません。ものの見方・考え方や興味・関心は、人によってさまざまですが、少なくとも自分がそうしてほしくないことは、人に対して行ってはなりません。これが人との関わりにおいて絶対に守らなければならない基本的なルールでしょう。『論語』にはこのようにあります。「子貢^{しかう}問ひて曰く、一言^{いちげん}にして以て終身^{これ}之を行ふ可き者有りや、と。子曰く、其れ恕^そか、己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ、と」と。子貢はたずねました、「ただひと言で、生涯にわたって実行してもいいような言葉がありましようか」と。すると先生が言われるには、「それは思いやりだろうね。(つまり)自分がしてほしくないことは、人にもしないということだよ」と。『中庸^{ちゆうよう}』にも、「忠恕は道^きを遠ること遠からず。諸^{これ}を己に施して願はざれば、亦人に施すこと勿^なかれ」とあります。まごころ・思いやりは道そのものではないが、道に近いものである、自分に対して願わしからぬことであるならば、またそれを人に対してもしてはならない、という意味です。ヴォルテールも、「自分にしてほしくないことは自分もしてはならないということは、地球のどこであらうと普遍的な原理である」(『カラス事件』)と言っています。

15. 義気あるべし、幼弱を扶くべし、強暴に屈すべからず。

義気とは、正義を守る心のことです。幼い者・力の弱い者が難儀な目に遭っていれば、助けてあげなければなりません。理不尽な力に屈してはなりません。それが正義です。『論語』のなかの孔子のことば

に、「義を見て為^なさざるは、勇無きなり」とあります。意味は、人としてなさねばならぬ正しいことと知りながら、それを行動に移さないのは、真の勇気がないのだ、ということです。弱い者をいじめるということは最も恥ずべき行為であり、最も軽蔑してしかるべきです。そうした者に対しては毅然とした態度で臨みましょう。

16. 知るは知るに止まるにあらずして、修為のためなることを忘るべからず。

知識は広く求めなければなりません。世界を読み尽くすつもりで、あらゆることに興味と関心とをもって接することが大切です。しかし知識がたんに知識の集積だけにとどまるとしたならば、それは知識の屑籠でしかありません。知識が一つの体系として組織づけられるとき、それは真の知識となり得るのです。しかし知るということの目的はそこにとどまるものではありません。『論語』にこうあります。「子曰く、古^{いにし}への学者は己の為^{ため}にし、今の学者は人の為^{ため}にす、と」と。先生が言われるには、昔の学者は自分の修養のために学問をしたが、今の学者は人に認められるためにしている、という意味です。知るということ、知的世界を広げるということは、己を修めること、つまり自己確立を目指すものでなければなりません。自己が確立されてこそ、その知は力となり、人を動かし、また社会に向かって発進する可能性を持ち得るのです。さらに『荀子^{じゆんし}』には孔子のこ^ふとば^{えん}を敷衍して、「君子の学は、耳より入りて、心に著^つき、四体に布^しきて、動静^あに形^{ぜん}はる。端^{ぜん}にして言^{げん}ひ、^{ぜん}蟻^ぎにして動^{いつ}くも、一^{いつ}に以て法則と為す可^しし」とあります。意味は、君子の学は、耳から入った教えが心に積もり（知識の集積）、それが身体のおすみずみにまで行きわたり（自己確立）、行動となって外にあらわれる、したがって、その人のちょっとしたことばや行動でも、ことごとく人びとの法則とすることができる（人を動かし社会に影響を及ぼす）、というものです。それを修己治人^{しゆうこ ちじん}といいます。

17. 自利の念を離るるに随ひて、人格の高大を致すものなるを記すべし。

自分の利益のことばかりを追い求めることを、利己主義といいます。利己主義は排他主義に通じます。それは協調性や連帯意識を欠いた者として共同体の一員としての資格を問われると共に、人間としての品位をも疑われることになります。自利の念、すなわち自分を利する考え、そこから離れれば離れるほど、高潔な人格を作りあげることができるということを銘記しなければなりません。『論語』にはこうあります。「子曰く、君子は義に^{さと}喻り、小人は利に喻る、と」と。意味は、君子はなにごとに対しても、すぐ道義を標準にして理解し、小人はなにごとに対しても、すぐ利益になるかならぬかということで理解する、ということです。わたしたちも利己主義におちいって小人にならないように、己にうち勝って高潔な人格を形成するべく励もうではありませんか。

創立訓 しやうい ようりょう 修為要領十七条

2011年4月1日 第3刷発行

発行者 唐 木 義 則

発行所 学校法人昌平黉 東日本国際大学附属
昌平中学・高等学校
福島県いわき市平上片寄字上の内152

電 話 0246-57-1123

印 刷 八幡印刷株式会社
福島県いわき市平字田町82-13
電話 0246-23-1471

Printed in Japan

